

ブラジルが空を「制覇」へ

ブラジルのハイテク？——ぴんとこない人が多いかもしれないが、かの国には日本も欧米もかなわないすごい技術がある。アポの時間も約束も守らないいいかげんな国民というのは、ある面正しいが、それだけで判断するとこの国を見誤る。

卓越した技術のひとつが航空機製造である。ブラジル最大の航空機メーカー、エンブラエルがカナダ・ボンバルディアと世界第3位の座を争っている。大型機はボーイング、エアバス両社の寡占だが、100人乗り前後の中小型機市場に限れば2010年はエンブラエルが確定受注機数で世界一だ。すでに日本航空にも納入されている。

そのエンブラエルがさらに進化を続け、とてつもない挑戦をしようとしている。サトウキビ由来のバイオエタノールだけで飛ぶ飛行機だ。そもそも航空機用のバイオエンジンなど聞いたこともない。戦時中の日本で、ガソリン不足に対応するため木炭を燃焼させる「木炭バス」や「木炭トラック」が走っていた。それと似た発想の燃料革命だ。環境対応もここまできると夢を通り越して空恐ろしくなる。

そんな航空機エンジンできるの？ と思いきや、この国では30数年前からエタノール自動車のエンジンをつくり続けていたから、どんな国よりもエタノールの扱いに慣れている。当時から新車の8割はアルコール（エタノール）自動車といわれた。ガソリン車と違

う排気ガスのおいさがサンパウロの街中に漂い、そのおいの記憶がいまだに筆者の鼻腔に残っている。

案外知られていないのが、ガソリンよりエタノールのほうがオクタン価が高く馬力が大きいこと。信号が青になって一斉にスタートする「信号競争」ではエタノール自動車が勝つ。

現在のブラジルの自動車燃料はバイオエタノールとガソリンを混ぜたものが主流だ。これを「フレックス車」と呼ぶ。実は日本で売られているガソリンもごく少量のエタノールが混じっているが、フレックス車の場合は逆にほとんどがバイオエタノールだ。

フレックス車の最大の特徴は「どんな割合で混ぜてもOK」というアバウトな発想だ。最近は天然ガスも加えた3種混合フレックス車も出回っているというから、この「いいかげんさ」を武器にできる社会はちょっとうらやましい。

アバウトは言い換えれば「余裕」や「だらかさ」につながる。ラテン的発想といってしまうとそれまでだが、これだけは「ルール」や「決まりごと」が好きな現代日本人の発想にはない。ブラジルで低シェアに甘んじるトヨタはフレックス車で他メーカーに後れをとったとの見方がある。ぎりぎりの経費削減を追求する日本メーカーの対極にあるアバウトな発想。この比較は経営学の新テーマになり得る。

さて話を飛行機に戻そう。エン

ブラエルの技術陣はエタノール飛行機を必ずつくり出すと思う。期待をこめていけば、その根拠はブラジル生まれの日系人にある。

エンブラエルには1000人以上の選りすぐりの日系人技術者がいる。彼らは最難関のブラジル国立航空工科大学（ITA）やサンパウロ大学の卒業生たちだ。特にITAは全寮制で5年間の奨学金があり、1学年120人にエンジニア向けの英才教育をほどこす。米国ハーバード大学やMITより入学が難しいという人もいる。

卒業生の多くは大学近くのエンブラエルに入社する。徹底した産学協同作戦だ。日本の三菱航空機（MRJ）がエンブラエルと同じ中小型機市場に参入しようとしているが、相手は予想以上に手ごわい。

歴史的にブラジルは空と縁がある。ブラジルでは自国民のサントス・デュモンが1906年に世界で初めて飛行機で空を飛んだ、とされている。懐中時計の時代に、仏カルティエ氏が腕時計を発明したのも、友人であるサントスが操縦しやすいようにと考えたからだ。カルティエの腕時計「サントス・モデル」は今でも人気だ。

私たちが教えられた1903年の米国ライト兄弟の初飛行は「米国の宣伝上手にやられた」というのがブラジル人の評価だ。どうやら空には特別のこだわりがあるようだ。





癒やしのボサノバが中国人を魅了

喫茶店、レストラン、ホテルのロビーなどに流れるバックグラウンド・ミュージック (BGM)。押しつけがましくなく、自然にそのサウンドを聞き手の頭の中に残す。奇特な人が、いったいどんな音楽がBGMに適しているか調べたら、なんとお店のざっと7割がボサノバやブラジルのポップスをBGMに使っていたという。

気づいていなくても、読者の皆さんはこの人の声を聞いているはずだ。小野リサがその人。知る人ぞ知る「ボサノバの女王」だ。最近リサの話を書く機会があり、驚いたことがある。

このところ中国ツアーに熱心で、2011年には中国23都市で連続公演したという。1989年に、ギターを片手にデビューして以来22年が経過、満を持しての中国公演だった。

クラシック音楽は昔から中国でも人気があるが、「イパネマの娘」に代表されるボサノバを初めて聞いた人は「あの不思議なサウンドは何だ」と奇妙な感覚にとらわれたに違いない。サンバやタンゴとは違う「心休まるラテン音楽」が中国人に浸透し始めている。

ボサノバの公演はジャズクラブのような小さな会場で開くのが普通だが、中国では2000人の会場は珍しくなく、時には5000人収容の大会場も使った。「本当は小さいほうが好きなんですけど、仕方ない」とリサは言う。

リサはブラジル生まれの日系2

世で、れっきとしたブラジル人だ。10歳の時に両親といっしょに日本に戻ってきた。見た目は日本人なので、「ボサノバを日本の音楽だと思った中国人もいた」という。

ボサノバとの出会いは、両親が四谷でレストラン兼ライブハウスを経営したことに始まる。音楽を専門的に勉強するため、米国の名門パークレ音楽院に留学、ジャズプレーヤーとの人脈も広がった。日本でポルトガル語の自作のボサノバでデビュー。それがCMソングに使われ「あの歌手はだれ？」と話題になった。1990年から日本全国ツアーを始め、93年には東京ブルーノートに出演を果たした。

転機が訪れたのは2000年ごろ。初の台湾公演を敢行、アジア諸国に目を向け始めた。自分のルーツが日本だったからだろう。2009年に北京、上海、香港、台北などアジアツアーを本格的に開始する。

リサの心の中には国境がない。日中両国は尖閣列島領有問題などでぎくしゃくしているが、そういう時期だからこそ、彼女のような存在は貴重だ。日本人の顔をしているブラジル人歌手がボサノバという音楽で文化交流をする姿は理想的といつてよい。

それを可能にしたのは国境を飛び越す語学力だ。「どんな言葉で歌ってもいいんです」とリサ。ポルトガル語と日本語はもちろんバイリンガルだが、中国語でもイタリア語でもフランス語でも抵抗な

く歌う。

クラシック音楽とボサノバの違いを聞かれたリサはボサノバには「形がない」「こだわりがない」と答えた。クラシックは決まりごとや形が昔から伝わっているが、ボサノバはそうした規制がない、という。加えてボサノバの「心地よさ」も指摘した。こうした特色はそのままブラジル人気質につながる。

リサにはこのブラジル人気質が生まれながらに備わっているから、その心情を音楽表現できる。大らかな気質に欠ける日本人が歌うにはボサノバは難しい音楽ジャンルかもしれない。

ボサノバはサンバのリズムを元に1950～60年代にリオデジャネイロで誕生した。64年の軍事クーデター後は体制批判的な音楽とされ、亡命するアーティストもいた。現在のブラジルではボサノバは残念ながら「ナツメロ」に属し、ブラジルポップス (MPB) と呼ばれる新ジャンルが主流となっている。

しかし、リサはこれからも芸域を広げていこう。世界的に有名なボサノバの作曲家アントニオ・カルロス・ジョビン (故人) の息子、孫たちとも交流を深めている。昨年リリースした26作目のCD「JAPAO (日本)」を「旅の終着点」としているが、本当の終着点はまだ先だ。

(和田 昌親)

